

くらふと
県育協だより

発行
鳥取県子ども家庭育み協会
・調査広報委員会



保育の現状と今後

鳥取県子ども家庭育み協会

副会長 大橋 和久

平成16年度は全国的には、三位一体の財政改革による保育所運営費の一般財源化への動き、次世代育成支援施策、総合施設への始動等、保育所にとって大きな変動の年でした。

三位一体の財政改革により総額3兆円に及ぶ財源移譲による動きは、まさに保育現場に携わる我々にとって、保育の危機であり、子どもたちが育つ上で最も大切な時期を市町村の財源力によってその育ちを左右しかねない大きな問題です。

鳥取県においては、我々は保育所運営費の一般財源化に対し、全国に先駆けて一昨年より鳥取県知事、県議会等に対して反対運動を展開してきました。しかしながら平成16年度から公立保育所運営費の一般財源化は避けられず、また平成17年度において民間保育所の一般財源化は免れたものの今後の保障はならぬ得られておらず、今後の推移を注意深く見守る必要があると思います。

財源移譲による保育所運営費の一般財源化の是非はともかく、保育と子育てに関してはどの市

町村においても一定の水準が保てる仕組みが、なんとしても必要であることは間違いありません。

今後、我々保育関係者は市町村の首長、議会に対し保育と子どもの育ちの重要性を論理的な説明と理解を求め、組織的に運動を展開してゆく必要性があると思います。

少子化が進み、次世代育成支援対策推進法に基づく市町村行動計画の策定が行われている中で、保育所も入所児童・家庭だけでなく地域の子育て家庭に対してより積極的に支援を求められています。少子化が進行し、国や自治体、保育所についてあれこれ議論し、恣意的に役割、機能を変革させてきた経緯はともかく、以前一部で言われていたような、子どもが幼い頃は母親が中心になって家庭で育てるべきというような考え方は全く通用しなくなっています。核家族で共働き、家族観が大きく変化した現代社会では家庭で子どもの養育を一手に引き受けるのは現実的ではなく、むしろ環境が整い、資質の優れた保育者の

いる保育園で育てられるほうがよいとする考え方が、多くの先進国で支持されているのも事実です。

我々保育関係者は、これら社会環境の変化や動き、ニーズに対応し、公立保育所の一般財源化の影響、一部で始まっている幼保一体型の保育内容等を検証しながら客観的に鳥取県における保育のあり方を模索することが必要となっています。それと同時に保育関係者が最重要課題とすべき子どもたちの育ちをどう保障してゆくの、すなわち乳幼児の発達のそれぞれの時期にどのような対応が必要なのか、その根拠は何か、それを支える環境、条件は何か等、理論と実践の積み重ねへの仕組みと方法を具体的に学べる研修、システムが求められていると思います。

折りしも、平成17年度から鳥取大学での保育科の新設、同大での現場保育者への再教育課程の開設など保育者の専門性への一つ試みが始まるとうとしています。今後、従来に増して組織を挙げてできるだけ一律に県内の保育、保育者の資質と専門性の向上を図って行くことが急務であり、社会から真に評価され、積極的な位置に就き、内外に向けて子育ての中心的役割を果たすことが大切ではないでしょうか。

しつけを問う

赤碕保育園長 福田泰雅

「…さんのお子さんは、しつけがしつかりできていてうらやましい。それに比べて…」最近あまり聞かれなくなった会話かもしれない。しかし、少年犯罪が起るたびに、世をあげて「家庭の教育力が低下した。」の大合唱である。「ちゃんと人の道を教えていればこんな犯罪は起こらなかつたのに。」という意味である。つまり、その時の「家庭の教育力」とは「しつけによる社会の秩序」がワンセットにされているのである。

そして、その言葉の裏には「昔は良かった。」との都会人の農村に対するノスタルジアがくつついてくる。ところで保育関係者も何気なく当たり前のように使っている「しつけ・家庭の教育力」とは一体なんだろう？しつけの目指しているものが「自立と共生」であることは想像がつくにしても、いつから言われ始めたのだろうか？

これらについてちゃんと研究している人がいる。「日本人のしつけは衰退したか」の著者、広田照幸氏である。詳しくは、その本を読んでもいただきたいが、この本によると、一種憧れを持って言われているような、農村での「しつけ」は、農作業に関係する「労働のしつけ」は家庭で行われていたものの、現代社会で言われているような「しつけ」には関心がなく、家庭が中心ではなかったようであ

る。しつけは、もつばら村の子どもや若者集団によってなされたのだが、その中身はというと良いことも教えるが悪いことも教えるものであった。

家庭の関心事は、もつばら「家の存続」にあり、女性や子どもはそのため犠牲となるのが一般的であった。それは遠い昔の話ではなく、60年程前では常識的なことであり、ドラマ「おしん」の世界がどこにでも繰り広げられていたのである。

「しつけ」に関心がなかった原因としては、西欧のように「子どもは成人すれば家を出て自分の家庭を持つ」のだから、それまでに子どもを自立できるように育てる」とする子育て観ではなく、「ほぼ一生をその村で暮らしていく生き方であれば、分別などというものは、そのうち身につくものだ」とする子育て観だからであった。

ただし、農村の中で医者や神社の家系などのように特別な職業を代々継いでいく家庭にあっては、一種帝王学のように「しつけ・家庭教育」が行われていたようである。いつからそのような極めて特殊な例が、一般的な家庭の教育力として認識され始めたのだろうか。それは「家」を中心とした封建的な家父長制の衰退と工業化社会の普及によって、農村から都市へ移り住み、世の中の9割以上が中流だと思いついた頃である。調査に

よると、これを裏付けるように「しつけ」は家庭がするべきだと考えているのは、都市部の家庭に多く、学校でしてほしいと考えているのは農村部の家庭に多い。

つまり、家庭において教育することが都市化した社会の中での幸福と密接に結びついたのであり、「そのうち分かるようになる」というのんびりとした生き方が否定されたのである。またこの時期は、発達心理学の柏木恵子氏の指摘しているとおり、子どもは授かる存在から、つくる存在へと変わった頃でもある。つくられた子どもは、その延長として大人にとって「よい子」へと計画的に仕立て上げられる存在となった。つまり現代は、飼育の対象としての子どもが誕生した時代でもある。

産業革命以来続き、我が国において究極にまで昇華された「都市化した価値観」早い、正確、効率的」がバブルの崩壊を通じて見直されている現在、幸せに対する価値観そのものが多様化し、家庭において「教育」する意味を問い直している。その解決への道は、都市化の反動で農村の原風景への憧れに生きて子どもや女性の地位を低めることなく、大多数を占める現在進行形の幸福な人々が求める「しつけによる社会の秩序」維持のためでもなく、子育ての責任を家庭に押し付けることでもない。真に一人ひとりの子どもが心豊かに生きるために、「どのような保育を目指すか」に答えがあるのではないだろうか。

第52回鳥取県保育推進研究大会 研修報告

第1分散会

鳥取県保育士国際交流研修報告書

田中比露美(かんの保育園) 船越 郁子(仁慈保育園)

〈東山保育園について〉
視察時、作品展をされていて、作品は子ども達に出来た喜びを与える為、職員の手がかなり加えられていた。
・アレルギーについては病院より親からの要求を優先。
・当番活動を取り入れているが、強制ではなく自由参加。
〈ナレ保育園について〉
・日本語教育：週2回 英語・ゴルフ教育：毎日 礼儀作法(伝統マナー)：月1回
☆英会話、ゴルフは直接保育には関係ないが地域での児童数集めの為必要。

〈釜山大学校付属保育園・マリナ幼稚園について〉
◎生態教育がベース
・自然と人
・人と人が一体になること
・子ども達が幸福になること
★釜山大学校付属保育園
・百九十三名入所(人気がある)
・塾がよいはダメ!と親にプログラムのある育て方を進めておられる。
・インスタント食品は一切使わず、有機栽培された食品のみ使用。
・保育プログラムの作成：散歩プログラム、子ども達が自分で遊べるようなプログラム等。

★マリナ幼稚園
・城のようなメルヘンチックな建物。
・保育教材をファイルでわけ、その時期にあった保育教材を保育者が出してきて使用。
・教育的要素が強い。
・保育士主導型保育：何時になつたら何をすれば決めてられた枠で遊ぶ
・自然学習場(2つ)：場所が遠かったり、クラス毎でいくので月1回から2回と利用回

数が少なく十分にいかしきれない。
〈韓国の保育について〉
◎子どもをめぐる今の状況
・保育所・幼稚園の二元化。
※日本と同じ
・日本の後追いをしているのかのように見えるが、韓国は韓国の問題を抱えている。
・女性が経済力を持った：離婚率が高い。
・出生率の低下。
・子育ての負担が女性に集中。
・受験戦争：塾の2、3個掛け持ちは当たり前。しかし、大学を出ても望んだ所では働けない。

◎保育園について
・早期教育：早期教育を徹底している方が人気がある。
・伝達型教育観、能力開発型教育観
・プログラム：日本のプログラムはもう一度見直していく必要があるように感じた。
・日本にも保育指針等があるが、それをどう保育におろしているのか?
・マリナ幼稚園のやり方は、誰がやっても同じ事が出来るが、日本はどうか?
・しつけについて：子どもに対してに思いながら、いろいろな教育をしているが人に対しての配慮、公共の場での配慮は教えられていない。しかし、異年齢の中ではしつけはされていた。家庭でのしつけは全くされていないわけではなく、物が手に入ると、幸せをつかむ為のしつけがされている。子ども達にきつい事は言えないお子様文化。

◎マリナ幼稚園、釜山大学校付属保育園の取り組み
・子どもにふさわしい発達、生活、学びの復活。自然な成長を取り戻す。
・「自然に学ぶ保育」の実施。
・二つの施設では、自然に学ぶことの意味が異なる。
※マリナではプログラムの中の一つ(ゴール)

※釜山は保育を発展させる為のスタート材料(すべての出発点)
☆韓国は、今年(昨年)から自然回帰ブームとなり始めた。今後は楽しみ!

第2分散会

「第三者評価」

用瀬保育園 山本大路
そもそも「第三者評価」とは何なのか?第三者評価の認知について、講師の渡辺氏より会場に質問があった。
その結果、「よく分かっている」と答えた人はほんの数人で、大半は「よく分からない」または「聞いたことはある」という程度だということが分かった。渡辺氏より「今日の会で、第三者評価」を理解し、使いこなせるようになる」と声があがった。この会はスタートした。一、経済新聞までもが子育てや家庭についての話題に紙面を割く現在である。保育の世界は、今、注目を浴びていると言えよう。保育とは何か。教育とは何か。これらを保護者にしっかりと説明できることが、現場の人間(保育士)には求められる。

第三者評価とはこれらの情報を自ら発信していくツール(道具)である。自信が自身を客観的に見て「自己評価」し、「自己改善」へ繋げることが大切だ。またそれを公表することで、世間の理解や協力を得られる効果も期待できるのではないかと。二、第三者評価の生命線は「自己評価」である。第三者評価を受けることによって、自己評価の方法を得ることが出来る。自己評価にとって大切なことは評価者と同じ視点で自己チェックし続けることである。自己評価の継続することであり、そのためには自己評価を続けていきながら三～五年に一度、第三者の評価を受けてリフレッシュする。このシステムの理想的な姿だ。三、第三者評価は「情報が公開

第3分散会

子どもの環境と発達

美保保育園 池上 啓子
報告
「0・1・2歳児の自我の育ちを支える視点について」(倉吉東保育園)

0・1・2歳児の、子どもの年令毎の発達をとらえて、保育をしていく中で、自分でしよう、自我の育ちを大事にし関わってきた。トラブルの場面を成長の過程と捉え2歳児では、自分でする、やりたいとの思いが強くトラブルの場面を友だちへの興味関心の表れと考え、保育士がお互いの子の気持ちを代弁したり必要なことを互いに相手に伝え記録していく子ども成長やその時の関わりは、どうだったかということ職員間で研修してきた。

「2歳児クラスの保育について」(鳥取みどり園)
朝のおやつ、排泄、食事などのデイリープログラムを見直しみんなで一斉にする機会を少なくして子どもの気持ちを大事にし小集団での関わりを多くしてきた。また、棚や身近な物で部屋を仕切ったりか

ごを用意するなど保育の環境を工夫すると、落ちついてじっくり遊べたり片付けの方法が分かったり保育者も子どもの動きを理解しやすくなり、援助の必要な子にかかわり基本的な生活習慣の自立につながった。また生活の場面でも次に何をするのか見通しが持て友だちへの関心もでき、仲間関係も育ってきた。

第三者評価の目指すものは、提供サービスと利用者のニーズのギャップの解消をはかり、よりよいサービスが提供できる環境を作ることにあり。第三者評価のシステムを取り入れて成果を上げた企業に日産自動車があるが、各人(各園)もこのツールを上手に活用していこうではないか!
第三者評価の目指すものは、提供サービスと利用者のニーズのギャップの解消をはかり、よりよいサービスが提供できる環境を作ることにあり。第三者評価のシステムを取り入れて成果を上げた企業に日産自動車があるが、各人(各園)もこのツールを上手に活用していこうではないか!

第4分散会

障害児保育

聖母マリア園 堀尾 陽子
保育園に対し障害児保育への期待が高まっている反面、現場においては様々な問題をかかえているのが現状である。保育者は、保育を必要としている子どもたち一人一人の発達を促

するために、適切な対応ができる専門性を身につけ、人としてたよられる豊かな存在となる。又、様々な行動の中で育つように導くには知識や経験、努力が求められている。保育の専門性を高めていく必要を感じゼミに参加された先生の報告を聞いた。
異なる障害の子どもの事例から障害児の発達・特徴をとらえ、保育の場面より障害特性を理解し、環境の配慮や援助といった保育の工夫。保護者の気持ちに寄り添った支援。専門機関との連携。保育園・家庭・地域の中で育っていく。子どもを信じ、子どもに学ぶことなど報告された。又、保育士との安定した気持ちや基盤としてのかかわり、信頼関係の大切さや障害児と向き合い、支え合う保育者でありたいなどの感想も聞かれた。

視覚障害児においては、受け入れ先がないので支援施設の整備が望まれる。
助言者からは、子どもの発達は一歩一歩である。子どもの特徴を理解したうえで、その子どもに合ったものを適切に対応し、解決していく。子どもと一緒に成長していく上で大切なことは、保育の失敗を恐れず、保育は失敗から学ぶことが多いなど話を聞いた。又、自分が変わっていく勇気を持ち、園の仲間・保護者と一緒に成長していくことで、子どもにいい影響を与える。現在はいろいろな家庭環境や状況の中で脳の障害だけでなく心の病を持った子や気になる子どもも多いため、その子どもたち一人一人のことを考えた手だてや支援をし、丁寧な保育を心がけることが大切であり、保育の質を高め、向上を図っていくことになると助言をされた。

第5分散会

家庭支援

八橋保育園 中原 紀子
子どもをとりまく社会環境も大きく変化し家庭の養育力も低下してきている。子育てのわか

らない親もあり、様々な課題をかかえて入園してくる子どもが増えてきた。以前は地域で気持ちよく子育てができていたが、今は地域の中での交流も希薄になってきており、地域で協力して育てることが難しくなってきた。又、核家族も増えており、家族の形も大きくかわってきている。その中でいろいろなプレッシャーを子どもも保護者もかかえていることが多い。保護者の孤立や孤独をいかに支えるかが子育て支援の核になる。
保育園は親が安心して子どもを預ける所であり、親と一緒に育つ子育てをしていく所である。親同士・親子・親と保育士・お互いが気持ちを出し合い、それをうけとる側と両者で助け合っていく事が大切である。その中で、家庭にどこまでどのように入っていくべきか、介入してほしくない親、介入する時期は等、保護者との信頼関係を育てることが難しい家庭もあり課題も多い。担任だけでは担任外の職員の方がとりやすい場合もあるので個々の状態を把握しながら職員全員でかかわっていくことが必要である。又、園だけではなく専門機関や地域との連携をもちながら取り組みをしていかなければならない。問題がおきた時、子どもの見方が大事になってくる。見方によってかかわり方も違ってくる。一方的な見方ではなく、全職員がいろいろな角度でみていき一人の子どもの姿をとらえ、十分連携をとりながらより望ましい解決に向けて見方を変え、前向きにみていくことが大切である。

保護者の労働時間の保障、安心して子供を産んだり、育てる為の育児休暇や病気休暇の保障。乳幼児をもつ家庭に対して子育てに合わせた労働時間の保障とゆとり等、子どもをもつ男女が安心して仕事をもてる社会をつくっていくことが大切である。



3歳～

子どもの成長と遊び道具
～いつからどんな遊具をあたえたらいいの？～



幼児期・学齢期のころに出会う遊具

成長カレンダー



新生児

反射でしっかりと握る、その力が思いがけないほど強いのに驚かされます。また、光にも反応をしめします。

ねんねのころ

手はいつも自然に「くー」の形に握っています。1.5ヶ月を過ぎてしばらくすると、自分の視野を横切る手を見つめるようになり、ついには手を見るという動作が完成します。

首がすわるころ

胸の前で手を合わせ、右手が左手に出会います。首がすわるということは、赤ちゃんが自分の身体をコントロールしはじめてきたことを意味します。

寝返りのころ

うつぶせになると気になるものに手を伸ばします。握る力がついてきます。

おすわりのころ

ポイと「捨てる」ことができて、いたずらも盛んに。目で見えたものに手を伸ばし、右手から左手へと持ちかえることもできるようになります。

はいはいのころ

自分の身体を自由に移動させることができるようになります。身の回りの世界の探求活動に熱中するようになります。「ちようだい」の言葉に応じられる子も出てきます。

立ちのころ

つまむ、ひねるなどの複雑な動きもできるようになります。

とっぴり歩きのころ

ボールを投げるなど、目標を決めて指をさせるようになります。反抗的態度が始まるのもこのころです。

赤ちゃん卒業のころ

積み木と別のおもちゃを組み合わせるなど、ストーリー性のある構成遊びを楽しむようになります。反抗的な態度が衰え、社交性が増してきます。

言葉とリズムのころ

遊びながら徐々に自分の身体を思い通りに動かせるようになり、同時に言葉を使いこなせるようになります。

着想と発見のころ

遊びのヒントの多くを自分の頭の中で見つけ出すことができるようになります。

思春期のスタート

記憶力、想像力と感情面の発達が著しく、家庭以外の生活に好奇心を抱きはしめまします。



● 友だちとの遊びが大切になる

3歳を過ぎた子どもは、もう赤ちゃんとはよびにくくなります。からだつきも、これまでのコロコロとした体型から、すらっとタテにのびたからだつきに変化し、動作全体にも機敏さがあふれてきます。このころになるとそれまで親のいうことがすべてだった世界から脱却、そろそろ友だちと遊ぶことが大事になってきます。社会的な関係ができて、友だちと遊ぶということは、他の価値観とぶつかりあい、人を受け入れていかなければならなくなることです。子どもが興味をひき、かつ友だちといっしょにプレイでき、コミュニケーションをとりながら遊べる遊具を選びましょう。



● 友だちといっしょに共同作業をする喜び

子どもは5～6歳ともなると、想像の世界から現実味をおびた世界へと興味がつつまもの。実際に近い大きな形をつくりたいという欲求が生まれると同時に、何人かの友だちとの共同作業で製作物をつくることに喜びを感じるようにもなります。大型の組み立て遊具を使って、幼稚園や公園にあるすべり台やジャングルジムなどを自分たちで組み立てたときの喜びは、子どもにとってこのうえないものです。共同作業の過程では、友だちを指導したり、友だちに従ったりという関係ができあがるなど、想像力ばかりでなく、社会性も養われていきます。



● 遊びをとおして役割意識や社会のルールを学ぶ

「ごっこ遊び」は子どもの大好きな遊びのひとつです。これまでは、自分の身近な家族などを模倣したままご遊びが中心でしたが、成長するにつれ、お店やさんごっこ、学校ごっこなど、大人の役割を演じるような想像遊びをするようになります。自分以外の他者（社会）のことが気になりはじめるこの時期、遊びをとおして、実際に買い物にいったときや、保育園・幼稚園での毎日のようすを追体験しているのです。子どもたちの遊びをよく見ていると、大人が想像している以上に複雑なやりとりがかわされています。しかも、子どもたちがそれぞれの役割をみごとに演じています。ごっこ遊びをとおして、子どもは役割意識や社会のルールを学んでいるのです。



● 現実の世界を教えてくれるサイエンストory

学齢期のころの子どもは、知的興味や好奇心が旺盛です。「これ何?」「どうして?」「なぜ?」といった質問攻めで、周囲の大人を困らせます。子どもは、遊びをとおして、いろいろなことを知り、興味・関心の世界を広げていきますが、現実の世界を教えてくれる遊びは以外と少ないものです。アメリカでは、天体、生物、自然などに興味をもてるように開発された遊び道具「サイエンストory」が注目されています。たとえば、望遠鏡や顕微鏡、小学校の理科室にあるような人体模型が、本物に近いところまで作りこまれ、手ごろな値段で買えるようになってきました。幼いころにめばえたシンプルな疑問に、きちんと答えることができるものが遊具としてあるのです。



● 空想を現実化する手段を知る

指先の器用さが、いちだんと増してくるのもこのころ。紙をハサミで切ったり、ビーズ玉を糸に通すといった細かい遊びができるようになります。さらに成長すると、糸にビーズを通していただけの遊びから、だんだん模様遊びや首かざりなどがつくれるようになります。積み木やブロック遊びでは、ただ積み上げるだけでなく、大人の見本どおりに形をまねたり、橋や家など、具体的な形をつくることもできます。子どもが心の中でイメージすることがらを、現実社会と同化させるような能力ができてはじめての証拠です。手や指先を使って、空想を現実化できることを会得します。



● みんなが遊べる、みんなで遊べる

豊かな遊びは、子どものすこやかな成長を育むという考えのもと、子どもの成長段階に応じた遊び道具をご紹介してきました。最後は「ユニバーサル・プレイング」、略して「UP」をとりあげます。「ユニバーサル」とは、万人に通じるという意味ですが、みんなのために＝誰のためにもならない、ということがよくあります。本来は「ひとりひとりのためのもの」であってこそ、みなにのたためになるのです。「UP」は、子どもも大人もお年寄りも一緒になって遊べるもの。だれもが遊ぶ楽しみを見つけられる遊び道具です。遊びは心を、体を、頭を活発に動かして、コミュニケーションを生み出します。遊びは子どもだけでなく、人間にとって必要不可欠なものです。本シリーズの最後に、ポーネルドは家族全員で、遊びを楽しむことをご提案します。



乳児保育研修会に参加して

八橋保育園 松本 典子

先日、一月十四日(土)県立福祉人材センターに於いて、保育士一五〇名あまりの参加で昨年に引き続き、講師 宮崎市よいこのもと第二保育園 園長 小笠原文孝さんをお招きし「乳児保育の基本と実践」の演題で行われました。

会場一テーブル十四、十五名、十テーブルを設定し講師の先生とフロアが一体となり愛情と熱のこもった講義を聴いたり、時には、フロアに「あなたなら、どうする?」と質問を投げかけられ、グループ討議をするという形態です。すめられ、常に日々の保育と向きあい考えたり、確かめあつたりと、自分の保育の姿勢や保育のあり方を見直す機会となり、とても有意義な一日でした。

「調乳は、どうやってしていますか?」「本当に、つくったミルクの量が子どものおなかの中に入っていますか?」「子どもが、喜んで飲む温度は?」;調乳ひとつ取っても、日々のしていることなのに、次々と投げかけられる質問に自信を持って答えられない。また、講義の中では、子どもの発育(発達)を促し、保障していく側の保育士は、一人一人の育ちを、きめ細



鳥取県保育所給食研修会から学んだこと

子供の国保育園 奥田 由美子



今、保育所の食環境も働き世帯の増加や、核家族化などの、子ども達を取り巻く社会環境の中で、さまざまな影響が出てきています。今年の春、厚生労働省から「楽しく食べる子供に」という保育所保育指針を基にした、食育に関する報告書が配布されました。これは、「食を営む力」の基礎を培うことを目標としています。又、構造改革特別区域における、「公立保育所給食の外部搬入方式の容認事業」という、規制緩和により公立保育所運営の、合理化を進める等の観点から、保育所事業への企業参入が可能になりました。

「なぜ、保育所給食が必要なのか」「楽しく食べる子供とは」、どういう指導をすればいいのかという観点から、県保育所給食担当者研修会に、講師として乳児保育、食育の著書を数多く出版されている、高橋美保先生に講義を受けました。その中で、食育は0歳から始まっている。乳児にとっての食事はどう食べるのかの技を身につけ、育てる咀嚼学習の場であり介助の仕方、伝え方が問われ、生後3年間の生活の仕方が、その後の子どもの食べ方や、食行動に大きな影響



書評

Books

保育の場は、なぜ、臨床の場である必要があるのか?

ISBN4-89347-071-X
¥1,800円+税

「保育臨床」とは、保育実践の中に「臨床の場」が立ち上がることである。では、「臨床の場」とは何か、「臨床」とは何を意味しているのだろうか。

中村雄二郎が説く「臨床の知」に覆われた現代社会への反省から生まれたものである。科学の知が、普遍主義・客観主義・倫理主義を特徴とするのに対して、臨床の知は、直感・経験・感受性・想像力から成り立つものである。本書では、この臨床の知をベースに、「子ども理解」はどうあるべきか、保育の場がなぜ臨床の場となる必要があるのかを、実践事例を駆使してわかりやすく具体的に解説した。保育の新分野を切り拓く必読の書! (表紙の言葉より)



子ども理解と
カウンセリングマインド
保育臨床の視点から



編集後記

平成十五年八月に育み協会が発足して以来、東・中・西部のメンバーから構成される調査、広報委員の一人として係らせていただきました。

日々の仕事が忙しい中メンバーが一同に会するのは大変でしたが、都合をつけ合いながら何度か集まって「くらふと」の構成や情報交換を行いました。長時間になることもありましたが、あれやこれやと皆で話し合い、色々な事がわかりとても私自身勉強になりました。楽しかった(?)です。

他メンバーの皆さん、本当にお疲れ様でした!
また、原稿を書いて下さった皆様、本当にありがとうございます。
今後とも「くらふと」ご愛読のほどよろしくお願い致します。
(村岡)

育み協会が発足し二年が過ぎました。専門委員会の調査・広報委員会を担当するという思わぬ大役に心配ばかりの中で「先生大丈夫だから。青年部の何人かに頼んでいるから」と立場を思いやってくださった大橋園長先生の心遣い感謝して始まった広報委員会でした。

言葉通り青年部の若きリーダー妹尾先生、村岡先生、村島先生に力をいただいたことは言葉にはしませんが、忙しい日々でもありました。私にとって情報を得ることのできる場として、多くの素晴らしい先生たちとの出会いの場でもありました。

忙しい中、原稿依頼に快く応じてくださった各地区の先生方がありがとうございます。皆様にご心よりお礼申し上げます。
(岡田)